2022/7/17

ヨハネの黙示録　講解メッセージ⑰

『ヨハネの黙示録 6 章　―封印が解かれる―』

■第 1、第 2 の封印

「また、私は見た。小羊が七つの封印の一つを解いたとき、四つの生き物の一つが、雷のような声で「来なさい。」と言うのを私は聞いた。私は見た。見よ。白い馬であった。それに乗っている者は弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て行った。」（黙示録 6:1-2）

歴史というものは、すべて同じパターンの繰り返しです。どの時代も、人が死に向かって生きていくということは変わりません。その死の恐怖から逃れようとして、人は見える安心を求めて生きているのです。黙示録は、そのような私たちに向かって、「心配しなくても大丈夫だ」と励ますための書です。ですから、いつの時代の人にも伝わるように、象徴で書かれているのです。

黙示録の「小羊」はイエス・キリストを指します。イエス・キリストは、光として世に来られました。闇の中に生きていた私たちは闇を知りませんでしたが、光が来られたことによって闇を知るようになりました。つまり、イエス・キリストが来られたことによって、私たちは自分の罪がわかるようになったのです。

さて、このとき、ヨハネが見たものは白い馬です。それは、弓を持ち、冠を与えられ、領土を拡大するために戦争を行うリーダーを象徴しています。この地上における最大の闇は戦争です。いつの時代にも領土を拡大する戦争がありました。戦争を始める人は英雄のように扱われます。しかし、それによって多くの人が苦しめられます。その様子がここに記されているのです。

光に照らされると闇が明らかになる、その闇の代表が戦争です。

「小羊が第二の封印を解いたとき、私は、第二の生き物が、「来なさい。」と言うのを聞いた。すると、別の、火のように赤い馬が出て来た。これに乗っている者は、地上から平和を奪い取ることが許された。人々が、互いに殺し合うようになるためであった。また、彼に大きな剣が与えられた。」（黙示録 6:3-4）

「火のような赤い馬」は、「怒り」の象徴です。光に照らされると怒りが明らかになります。怒りは地上での平和を壊し、最終的には互いに殺しあいます。怒りは大きな武器となって私たちを苦しめています。私たちに光が照り始めると、私たちの中にあった怒りという罪が明らかにされるのです。

なぜ私たちは罪を犯すのでしょうか。聖書は一貫して、「罪とは死のとげである」と教えています。悪魔のしわざによってこの世界に死が入り込み、その結果人は罪を犯すようになりました。聖書の中で「闇」と「死」は同義語です。つまり、私たちが罪を犯す原因である闇を、光は明らかにするということです。光とは神の律法を指す象徴でもあります。私たちの罪は、神の律法によって明らかになるのです。

> 「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです。というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です。」（ローマ 5:12-14）

アダムが蛇にあざむかれて神と異なる思いを持ったことで死が入り込んで神と分離し、全人類が神と分離しました。ここでは、「それというのも全人類が罪を犯したからです。」となっていますが、聖書の研究がさらに進んだ結果、この訳は誤りで、「その結果、すべての人が罪を犯すようになった」と訳すべきであることが、20 世紀末にわかっています。ですから、次のように訳したほうが正確です。

> 「そういうわけで、ちょうどひとりの人を通して罪がこの世に入り、罪によって死が入り、まさしくそのようにして、すべての人たちに死が広がった。その結果、すべての人が罪を犯すようになった。」（ローマ 5:12（私訳））

死が入り込んだその結果すべての人が罪を犯すようになったということは、今まで闇がなかったところに闇が来た、つまり、神が見えなくなったということです。そして人は、神を認識することができない不安から見える安心をむさぼるようになったのです。これが罪です。つまり、律法がなくても罪は存在していました。しかし律法が

なければ、罪が何か認められません。神の律法が来たことで、罪が明らかになったのです。それが、「第二の封印を解く」ということです。

死はアダム以降私たちに入ってきたものであり、私たちは死に支配されていました。確かに、アダムの子どものカインは、律法とは関係なく、アベルを殺すという罪を犯しました。罪とは何かを考えるとき、律法が罪を発生させたと主張する人がいますが、そうではありません。死が罪であり、死が入ったことで罪が入ってきたのです。律法は、あくまでもその罪を明らかにするためのものです。

このように、光が来て闇が明らかになる様子が、ヨハネの黙示録には書かれています。

■第３、第４の封印

「小羊が第三の封印を解いたとき、私は、第三の生き物が、「来なさい。」と言うのを聞いた。私は見た。見よ。黒い馬であった。これに乗っている者は量りを手に持っていた。すると私は、一つの声のようなものが、四つの生き物の間で、こう言うのを聞いた。「小麦一枡は一デナリ。大麦三枡も一デナリ。オリーブ油とぶどう酒に害を与えてはいけない。」」（黙示録 6:5-6）

「黒い馬」は飢餓の象徴です。死がこの世界を覆ったことで、飢餓というものも発生するようになりました。飢餓に対して対応できるのは誰でしょうか。それは、私たちです。私たちが互いに助け合うことで解決するしかないのです。

死が入ったことによって、戦争という患難、罪（怒り）という患難、そして、飢餓という患難が生まれました。この飢餓に対しては、私たちは互いに助け合うことができます。

「小羊が第四の封印を解いたとき、私は、第四の生き物の声が、「来なさい。」と言うのを聞いた。私は見た。見よ。青ざめた馬であった。これに乗っている者の名は死といい、そのあとにはハデスがつき従った。彼らに地上の四分の一を剣とききんと死病と地上の獣によって殺す権威が与えられた。」

（黙示録 6:7-8）

「青ざめた馬」は、肉体の死の象徴です。死は最大級の患難です。すべての人に死は必ず訪れます。そして、その死の後にはハデスが付き従いました。ハデスは「よみ」

とも訳され、それは火と硫黄の池、すなわち永遠の死を象徴しています。人が完全に滅んで無となった状態です。

人間の本質は精神です。精神が存在するためには、相対するものを認識する体と、それを判断する物差しが必要です。このようにして意識が生まれ、精神が機能するようになるのです。これが哲学の定式です。

神様は初めに、天と地を創造なさいました。宇宙を造り天と地を造り植物と生き物を造って、最後に人間を造りました。それは、人が認識するための客体がなければ人が機能しないから、まずは客体を造り、それを認識するために、土地のちりという同じ材料で人間の体を造り、そこにいのちの息を吹き込んで、人は生き物になったと記されています。この「いのち」は複数形で、三位一体の神のいのちを表しています。これが魂です。神のいのち、これが私たちの中の物差しなのです。だから私たちは神と同じように言葉という概念を持つことができます。動物は神と言葉でコミュニケーションすることはできません。人間だけが神に似せて造られたとは、そういうことです。人は神と同じ物差しが与えられたのです。こうして私たちは、何かを認識し、神のいのちという魂によってその情報を判断し、意識が生じるのです。つまり、人間の実体は、体と魂であるということです。

> 「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」（創世記 2:7）

精神が生じるためには、体と魂が必要です。ということは、体が死を迎えると情報が収集できなくなり、何も認識できませんから、精神も生まれません。これがハデス、すなわち永遠の死です。ですから、肉体の死と同時に、そこにあった魂は神に返却されます。つまり何も残りません。これが「空の空」あるいは「虚無に服する」ということです。

> 「ちりはもとあった地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る。空の空。伝道者は言う。すべては空。」（伝道者の書 12:7-8）

このように、ハデス（永遠の死）とは、何もなくなる状態のことです。イエス様も肉体の死と同時に魂は神に返却されるという意味のことを語っておられます。ですから、私たちが死なないためには、朽ちない霊のからだが必要なのです。これが、永遠

のいのちです。この永遠のいのちを受け取る方法、それは神の呼びかけに応答することです。

神は霊ですから、神への応答は、肉体ではなく潜在意識の中で行われます。生きている者は皆神によって支えられていて、神とかかわっています。ですから、誰でも神の呼びかけに応答することができ、応答した人は霊のからだを受け取り、救われて永遠のいのちを得ます。救われて霊のからだを着せられると神の国の情報を収集できるようになります。ですから、救われた人は、御言葉を聞くことで、イエスが神であるということを信じられるようになるのです。これが救いが自覚できるようになるということです。ですから、イエス様を信じているならば、すでに霊のからだを着せられて永遠のいのちが与えられているのです。

つまり、私たちは、生きている間にしか神の呼びかけに応答できません。それで、神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神だと言われます。神への応答は潜在意識の中のことなので、いつ応答したか自分でもわかりません。しかし、応答した人は教会に来るようになり、キリストの言葉を聞いて、信じるか信じないかという葛藤が生まれ、やがて信じるという決断に至り、水のバプテスマを受けて信仰を告白するようになります。バプテスマを受けたから救われるのではなく、救われたからバプテスマを受けられるようになるのです。

「神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。というのは、神に対しては、みなが生きているからです。」（ルカ 20:38）

今あなたが生きているのは、自分の力ではありません。神のいのちの息を吹き込まれたことで、神のいのちがあなたを支えているから生きられるのです。すべて生きている人の土台には、神がおられます。つまり、生きている者は皆神とかかわりを持っているわけですが、死んだらもう神とかかわれません。ですから、生きている間に人を救うため、神は 24 時間呼びかけておられます。それに応答するものは救われ、神との関係を拒否する者にはハデスという永遠の無が待っているのです。この時、神との関係は完全に断ち切られてしまいます。

私たちの土台は神です。そして、土台であり続けるためには体が必要なのです。体が朽ちると神が貸し出した魂は神に返却されます。ですから、それまでの間に神に応答してもらおうと、神は呼びかけ続けておられるのです。

神と出会うのはいつか、それは今です。イエス・キリストは私たちに決断を迫っておられます。神を理解せよとか、神の知識を持ちなさいなどとは言っておられません。

信じるかどうかだけの決断だけを迫ります。おぼれている人は、ボートにつかまるかつかまらないか、生きるか死ぬかの選択しかありません。私たちはこの世界でいろいろな選択があるように思いますが、実は何もないのです。この世界で何を手にしてもそれは無です。私たちにできること、それは神との関係を築くことです。神との関係を深く築いていくこと、これをいつまでも残るもの、信仰と希望と愛です。この選択こそ、聖書が私たちに一貫して教えていることです。

■第５、第６の封印

「小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしとのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行なわず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい。」と言い渡された。」（黙示録 6:9-11）

第４の封印までは、死んでいる者はハデスに行くということが語られてきましたが、第５の封印からは、神の呼びかけに気づいて応答した人について語られています。

「祭壇の下にあるたましい」は、神の呼びかけに応答し救われた人を表しています。イエス・キリストは、救われた人に向かって「あなたは神の国のただなかにある」と言われました。私たちには神の国は見えませんが、霊のからだを着せられてその魂が移されたので、もうその祭壇の下にあるということです。しかし、救われた人々は「救われたのなら、なぜ今すぐ天国に移されないのか、この地上での患難はいつまで続くのか」と大声で叫びました。それに対して神は、彼らに白い衣を与え、「もうしばらくの間、休んでいなさい」と言われました。

「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」（黙示録 3:5）

白い衣は、霊のからだ、すなわち永遠のいのちを指します。白い衣が与えられたら、救いが取り消されるようなことは決してないのだから、復活の時まで、信頼してもうしばらくこの地上で忍耐して待っていなさい、と神様は言っておられるのです。

「私は見た。小羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。そして、太陽は毛の荒布のように黒くなり、月の全面が血のようになった。そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実を振り落とすようであった。天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山や島がその場所から移された。地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」」（黙示録 6:12-17）

この地上で忍耐して休んでいると、やがて世界が終わる時が来ます。それは、個人の死です。肉体の死を迎えると、私たちはもうこの世を見ることはできません。すべて消えてしまいます。その時、信じない者は皆滅びますが、信じた者は復活します。その時を待っていなさいと語られているのです。信じなかった者たちは、何としてもこの世界にとどまり続けようとして、自分の名を残そうとします。これはいつの時代も同じです。

「御怒りの大いなる日」とは、大いなる患難のことです。イエス・キリストはこの世の封印を解かれた光です。光はやみを照らし、命と死を明確にしました。そして、イエス・キリストを信じて生きる者となるか、死ぬかの選択を迫ります。これが私たちにとって最大級の患難、苦しみとなるのです。なぜなら光は私たちをこの世から引き離そうとするからです。その時、この世にしがみつこうとすることが、人の苦しみのすべてです。

人の苦しみの本当の原因は、この世にしがみつこうとする手を神が引きはがそうとするところにあります。

神はあなたをこの世から引きはがし、いのちに連れていこうとするのですが、あなたは必死にこの世の評判を握りしめて放さず、富にも仕え神にも仕えるという状態に身を置きます。これが私たちの苦しみです。

それを手放し、すべてを神にゆだねることができるようになること、これが砕かれるということです。砕かれて真に神を見上げるようになることが、心の向きを変える

ことであり、神様は常にこのことをあなたに問うておられます。これが私たちにとっての患難です。

この患難にどんなに抵抗しても、人は耐えられません。早くギブアップして、主を信頼し、主の憐れみを求めることができれば幸いです。

イエス・キリストというお方は、私たちが納得する対象ではありません。信仰の対象です。イエス様は、信仰の対象となるために、徹底的にご自分が神であることを隠されました。人としてこの地上に来られ、肉の父と母を持ちながらも、私の父は天におられると公言したため、多くの人はこれを理解することができませんでした。それでもイエス様はご自分を隠して行動し、つまずきの石となりました。それは、目の見えない者が見えるようになり、耳の聞こえない者が聞こえるようになるためであると、イエス様ご自身がおっしゃっています。つまり、理性や知恵によって神を知ることが決してないようにするためです。ただ信じるだけで救われる、これが神の知恵です。

神のなさることは、私たちには理解不能なことだらけです。なぜ私たちの罪のために十字架に架かったのか、なぜ復活できたのか、なぜ神が人のために死ななければならなかったのか、わからないことばかりです。しかし、十字架の言葉は信じる者には神の力となります。大切なことは、神の言葉を信じることです。こうして神は、人間が築き上げた行いによって救われるという律法の道を完全に廃棄し、信じる者が救われるという道を示したのです。

白い馬に乗って次から次に領土を拡大できる人が救われるわけではありません。ただ神の呼びかけに応答し、信じる者が救われるのです。

イエス・キリストは、私たちに現実に目を向けさせるために、光となって来られました。自分が実はみじめな人間であること、自分を待ち受けている死の恐怖、それにどれだけおびえて生きているかの現実に気づかせ、自分の弱さを認めて神に憐れみを乞う者を救われるのです。弱さのうちに神の恵みが働く、これが真理です。